



花錦

第五号

目次

おすすめの本紹介 (POP)

うつす	蜃気楼	… 2	吉田秋生『BANANA FISH』	… 46
ふとん	蜃気楼	… 2	深緑野分『この本を盗む者は』	… 47
シ	紫雲英	… 3	相沢紗呼『medium 霊媒探偵城塚翡翠』	… 48
ナンバー52	広田千香	… 4	柴田ケイコ『パンどろぼう』	… 49
MORIのくまさん	熊本のおこめ	… 12	砥上裕将『線は、僕を描く』	… 50
カーテン	もなか	… 15		
僕の話	人馬宮マサ	… 20	あとがき	… 51
追憶	紫雲英	… 43		

うつす

うれしい 悲しい 楽しい 美しい
一瞬を切り取ることは
難しく簡単なこと

うれしい 悲しい 楽しい 美しい
切り取ることには執着すれば
多くのものを逃してしまう

蜃気楼

ふとん

ねむいのにねむれない
目を閉じててもねむれない
何も考えないように
考えないように

今日こんなことあったな
なんであんなことしたんだろう
ああすればよかった
明日はあれしなきゃ

考えないようにしてたのに
考えだして ねむれない
でも 頭がすっきりしたかも
何も 考えないように
考えない…

蜃気楼

シ

紫雲英

「シ」は偶然であり、必然である。

「シ」は絶望であり、救済である。

「シ」は別れであり、再会である。

死と生は切り離せない。

故に「生きる」ということは「シぬ」ことであり、
「シぬ」ということは「生きた」ということである。

広田千香

今回の依頼は猫探しだった。下高田さんが飼っているマリリンちゃんがいつもの昼食後の散歩から、もう三日も帰ってこないらしい。

「早く探してください！今この瞬間にもマリリンが危険な目に遭っていると思うと、いてもたってもいられないんです！」依頼者は下高田家の奥さん、裕子さんだ。とても焦っているようだが大切な家族が行方不明なら無理もないだろう。

「もう家の中は家族とハウスキーパーの赤坂さんと林さんで探し尽くしました。多分もう外に出ていますかと思えます。」こう言われてもやはり疑うのは敷地内である。でも、絶対とは言いきれないし、一度探した場所をまた探されるのは飼い主にとって不愉快に思う人もいる。

「下高田さん、気持ちちはわかりますが落ち着いてください。猫探しに関しては私たちの方が経験はありますが、マリリンさんに関しては奥様の方が詳しいはずです。まず、マリリンさん

の特徴や好物、家の中でお気に入りの場所、逆に苦手なものなどを教えてください。」

私の上司である来栖さんが冷静に質問をする。

「は、はい。マリリンはマグロが大好きで、娘の部屋にある毛布といつも使うねこじゃらしがお気に入りです。」

裕子さんが話し始めると来栖さんが私を肘で小突いた。メモをとれという意味だ。慌てて手帳にメモを取り始める。

「マリリンさんについては大体分かりました。それでは本格的に搜索を始めようと思います。」

来栖さんは毛布、私はねこじゃらしを持ってそれぞれ搜索を始めた。この家は住宅街のなかにある豪邸で周りを高い塀で囲ってあるが、家の壁と塀の間に高い木が生えている。また門を入れて左に行くと広い庭もある。この中に潜んでもおかしくないが、奥さんは私たちに、なぜ早く外に探しに行かないんだ？とも聞いたような顔だ。来栖さんはこちらを見て、門を指差した。とりあえず近辺を探そうという意味だろう。私はうなずいて、下高田家を出た。

探し始めて二時間くらいすると、来栖さんから電話がきた。その声は興奮していた。

「今すぐ戻ってこい！猫なんか探してる場合じゃないぞ！」

緊急事態のようだ。私はねこじやしを握りしめて豪邸へ走った。門を走り抜けて玄関に飛び込むと背の高い男性とぶつかった。相手もだいぶ慌てているようで、すみません、と言ってすぐ庭の方に走って行ってしまった。応接室の方に向かおうとするのと来栖さんが二階から降りてきて「二階だ。」と言って、またすぐ登って行った。何が起こったかわからぬまま階段を登ると下高田家の主人、下高田実さんが部屋の前に立ちつくしていた。来栖さんと実さんの背中越しに地面に広がるガラスの破片が見えた。

警察が到着した後、私たちは下高田邸の一階の広間に集められた。最初に通された応接間も充分広いと思ったが、広間はずっと広い。豪華な部屋の中で居心地の悪い私と違い、来栖さんは落ち着いているようだ。家主である下高田夫妻の方が、落ち着かないようである。それと部屋の隅には、二人の男女が立っている。

「皆さん。集まっていたいただきありがとうございます。これから一人ずつ隣の応接間に来ていただいて、お話を聞かせていただきます。」

到着した警察たちの中で一番年配そうな男性が言った。それから一番に私と来栖さんが呼び出された。

「一人ずつと言いましたが、あなた方は同じ事務所の方々のようですね？今日は、この家の飼った猫探しのためにいらしたとか。」

来栖さんが、そうです。と答えた。

「ご存じの通り、下高田さんが大切にしていた宝石がなくなりました。下高田さんが書斎にいない間に消えたそうです。部屋には荒らされた形跡はなく、なくなったのは宝石だけだそうです。」やたら、詳しく説明してくる。これは、まさか。

「私たちを疑っているんですよね？」来栖さんが切り込んだ。

「いえ、あくまで重要参考人というだけです。」年配の警察官、中居さんが首を振った。

だが、今この屋敷で部外者は私たちだけだ。一番怪しいのも私たちだろう。

「失礼ですが、十一時から十一時三十分の間は何をしてらっしゃいましたか？」アリのバイの確認だ。

「その時間は別れて近所で猫探しをしていました。」来栖さんが答える。

「つまり、お二人とも一人で行動していたんですか？」

「はい、そうなります。」

つまりアリバイがないということである。ますます怪しくなつてしまった。

「ま、待つてください。私は近隣に住んでいる方にお話を聞いて回ってしました。その方たちに確認してみてください。」私は中居さんに訴えた。

中居さんは表情を変えず、分かりました。確認します。と答え

た。「あなたの方はどうですか？誰かと話したりしていませんか？」

そして、来栖さんの方を向いて聞いた。

「いいえ、ずっと一人でした。」少しの沈黙の後、来栖さんはそう答えた。

話を聞かれた後、私たちは広間に戻された。広間にはご夫婦と女性が一人、そして警察官たちが待機している。

「そういえば、娘さんがいらっしやいませんか。」私が来栖さんに耳うちすると

「この子どもはもう一人暮らしをしているんだろう。」と返した。誰も何も言わないということはそうなのだろう。少しする

と、裕子さんが話しかけてきた。

「あの、お話はどうなことを聞かれましたか？」

「十一時くらいの間、どんなことをしていたかと聞かれました。」

「それは犯人だと疑われているということですか?!」裕子さんが驚いたように言った。

「いえ、そういうわけではないらしいです。」私が返答すると来栖さんが実さんに話しかけた。

「宝石がなくなったのは十一時から十一時三十分の間なんですか？随分短い間ですね。」

実さんがそれに答える。

「いいえ、一階のキッチンにお茶を取りに行っただけなので、目を話したのは、実際は十分くらいだと思います。」

十分の間に宝石が盗まれたということか？でも、宝石にはガラスケースもあったし、きつと厳重なセキュリティがかけられていたはず。それを十分で外すのは難しいのでは？

「いや、それが宝石の上にはガラスケースが置かれていただけなんです。」

え？

「ということは、ケースのカギを開ければ、宝石は盗めたとい

うことですか？」

来栖さんが窃盗である前提で話を進めている。

「いえ、鍵もかけていませんでした。」言いづらそうに実さんは答えた。

つまり、ケースをどかすだけでよかったってことか。そんなの十分どころか五秒でできる。実さんが話を続けた。

「今日は久しぶりに大学の友人が来る予定があつて、そいつに寶石を見せようと思つてたんです。もう、その予定は無くなりましたが。それで、すぐ見せられるように鍵もかけずそのままです。」

不用心だなあ。実さんの話が終わったところで、中居さんと話を聞かれていた男性が広間に入ってきた。

「来栖さんと橘さんのアリバイが取れました。橘さんは近隣の家々を回つて話を聞いていたこと、来栖さんは近隣の交番の警察官に職務質問されていたことを確認しました。」

「そういえば職務質問されていた。よかつた。」

よくない。だが、これでアリバイは証明された。私たちはもう帰つてもいいことになった。

「いえ、マリリンさんが見つからないのに帰るわけにはい

きません。捜査の邪魔は致しませんので、マリリンさんを探させてください。」来栖さんが中居さんに向かって言った。そうだった。私は猫を探しに来たのだった。このまま帰るわけにはいかない。下高田夫妻に礼をして、私たちは外に出た。庭の端の方まで来ると、来栖さんがこちらを振り返つた。

「じゃあ、今から誰が宝石を盗んだ窃盗犯か考えるぞ。」

「え？マリリンを探すんじゃないんですか。」

「猫探しより犯人探しの方が、報酬が多いに決まつてるだろ。」

犯人探しが優先だ。」

さつき広間で宣言したのは、家の中をウロチョロしても怪しまれないためだ。と来栖さんは付け加えた。じゃあ、猫はどうするんですか。

「そんなの放つておいたら帰ってくるだろう。」

ひどい。啞然とする私をよそに来栖さんは考えを話し始めた。

「部外者が怪しいという警察の考えを参考にすると、俺らの前に家に入り出すようになった人間が怪しいだろう。今回の容疑者は誰だ？」

「容疑者つて、泥棒が入つたと考えるのが普通じゃないですか？」

「警察は俺らのことを真つ先に疑ってただろ。つまり、泥棒や空き巣じゃないという証拠があるんだよ。」

そうかなあ。あと、なんだか来栖さんが元気になったような気がする。事件が大きくなって明らかに喜んでる。

「広間にいたのは、下高田夫婦とエプロンをつけた女性と若い男性だったよな。女性と男性の方はハウスキーパーか？よし、事情聴取が終わっていた若い男性の方に話を聞こう。」

来栖さんは、勝手に一人で話を進めて、行動し始めた。若い男性は、キッチンでティーカップを拭いていた。よく見ると、さつき玄関でぶつかった人だった。

「すみません。あなたはこの家のハウスキーパーの方ですか？来栖さんはキッチンに入っただけで男性に話しかけた。」

「あ、はい。ニコニコクリーニングから派遣された、林です。」

「この家にはいつから派遣されているんですか？」

「二週間前からです。以前から担当していた赤坂さんのヘルプで来ています。」

林さんは、怪訝そうにしながらも話してくれた。
「なぜ二週間前からヘルプを呼ぶようになったんですか？赤坂さんは広間に一緒にいた女性の方ですよ、彼女はいつから

この屋敷を担当されているんですか。」

来栖さんが質問を繰り返す。
「え、あなたがたはマリリン様を探しに来ているんですよ。なぜそんなことを聞くのですか？」当然の疑問だ。もうこの人に聞き込みはできないな。

「大いにあります。この答えによってマリリンさんが見つかると言っても過言ではありません。」

嘘ついた。来栖さんが嘘ついた。
「そうなんです。赤坂さんは、二十年前からこの家を担当していたんですが、年齢のため最近ヘルプを頼むようになったそうです。」

林さんは、素直に答えてくれた。来栖さんの方を見ると何やら考え込んでいるようだ。少しの間俯いた後、急に顔を上げた来栖さんは、

「すみませんが、庭の方に来ていただけませんか？」と言った。

三人で建物の外に出た。林さんはキッチンでの仕事を中断させられて、不満そうな顔だ。玄関の少し横くらいまで来ると、来栖さんが林さんに話しかけた。

「林さん。もしあなたがこの家に入った泥棒だとしたら、どう

やってここから書齋に入りますか？」

「え？」驚いたのは私だ。そんな大胆な質問をして大丈夫なのだろうか。

「：そんなことわかりません。」林さんは言った。

「考えてみてください。そうですね、例えばこの家の玄関には大きい屋根がついていますし、屋根を支える柱を登れば二階の窓から入れそうじゃないですか？ 書齋の窓の近くには、下まで雨どいが繋がっていますね。あれを登ったら、すぐに書齋に忍び込めますね。」

来栖さんは林さんを試しているようだ。林さんは何も言わない。「でも、そんなこと普通の人ができるんですか？ あの雨どいなんてすごく長いですよ。」

辛抱たまらず私が来栖さんに言い返した。来栖さんは私を一瞥した後、

「あなたは学生の頃、何部でしたか？」と林さんに聞いた。

「囲碁・将棋部です。」

「じゃあ、できるだろう。」

本当かな。聞かない方が良かったんじゃないかな。

林さんの気分を損ねてしまったため、彼への聞き込みはこれで

終わりにした。庭の中を歩きながら来栖さんに質問した。

「来栖さん、どうしてあんなこと聞いたんですか？」

「俺たちが猫探しに行く前、あの人は庭で掃除をしていた。窓からなら廊下で実さんと会わずに部屋に入れるだろう。」来栖さんは何てことないというように答えた。

そのまま私たちは、庭の端にあるプレハブの小屋の前に来た。来栖さんは躊躇せず扉を開けて中を物色し始めた。

「何してるんですか！ 泥棒みたいですよ！」

「いや、犯行に使えそうな物はないかと思って。橘も探せ。」しづぶ私も探し始めた。

小屋は物置のようで、中にはシャベルやリヤカー、土に混ぜる肥料などがある。結構、棚が多くてこれらを全て見るのは大変そうだ。引き出しを開けたり、閉めたりしていると、一つ他のより重いものがあつた。この引き出しには、何が入っているんだ？ 恐る恐る開けると

「あ。」

丸くなった猫が寝ていた。音を出さないように来栖さんと呼ぶ。来栖さんも、あ。と言った後、小屋から出て裕子さんと呼びに行つた。

「ありがとうございます。本当に、何度お礼を言っても足りないくらいです。」

裕子さんがまた頭を下げた。マリリンは、裕子さんの腕の中で大人しくしている。

「いえ、見つかって良かったです。一応、病院に連れていくことをおすすめします。」

来栖さんは、笑いながら首を振った。まさか、数分前まで猫を見捨てていた人とは思えない。赤坂さんが、病院に電話してくれて、マリリンさんはすぐに診てもらえることになった。

「マリリン、大丈夫？」裕子さんが心配そうに言った。

見ると、マリリンが床に下りていた。下を向いて、カッカッと音を鳴らしている。

「おい、あれは大丈夫なのか？」来栖さんが私に聞いてきた。

「猫は自分の舌で毛づくろいをするので、毛を飲み込むことがあるんです。そしたら、ああやって吐き出そうとするんです。」少しするとマリリンは嘔吐した。ああ、高そうな絨毯が…。内心そんなことを考えていると、裕子さんが吐しゃ物の中の何かを拾い上げた。

「掃除は私が致しますので、奥様はお手を洗ってください。」赤

坂さんが慌てて言う。

「ねえ、これって。」そう言った裕子さんの手にあったのは、赤く輝く宝石だった。

次の日、裕子さんが電話をくれた。マリリンは動物病院で診てもらったところ、体に異常はなかったようだ。三日間ご飯を食べに來なかつたのは、物置に置いてあったストック用のキャットフードの袋を破いて食べていたかららしい。つまり、マリリンは屋敷の外には出ていなかったのである。裕子さんもまさか物置の引き出しの中にいると思わなかつたらしい。そしてあの日、マリリンは実さんが一階のキッチンに行っている間に、書齋に忍び込み、ガラスケースを床に落とした後、ルビーを飲み込んでしまったのだ。裕子さんは、もうマリリンをうちの外に出すのはやめると話した。今回は敷地内にいたから良かったものの、もし外にいたら本当に迷子になっていたかもしれないし、車などにひかれてしまう可能性もある。これからは今までの以上に、責任をもってマリリンと暮らしていくと、裕子さんは言った。

「まるで、怪盗のような猫だな。」来栖さんが裕子さんの話を聞いてそう呟いた。あの後、来栖さんになぜ犯人探しを優先した

のか聞くと、

「俺はそもそもああいうことがしたくて、探偵になった。」と答えた。来栖さんは、小さい頃からミステリーが好きで、ずっと名探偵になって難事件を解決することを夢見ていたらしい。でも、実際に探偵になってみれば、来る依頼は浮気調査や、迷子になったペット探しばかりで落胆したらしい。あんな小説の中のようなこと現実にかかるはずないって、思わなかったのだろうか。

「まあ、でも警察の知り合いができたのは、探偵っぽいな。」と、中居さんの名刺をひらひらさせながら満足そうに言った。でも残念ながら、来栖さんが夢見るミステリーのような展開は、ないだろう。

とはいえこれで、来栖探偵事務所52件目の依頼が終了した。

MORI の くまちゃん

熊本のおこめ

今日は、私たち、MORI のライブに来てくださって、本当にありがとうございます！ Aka と OhGod の衣装チェンジに時間がかかっているため、間を持たせるように命令されました Kuma3 です。何を話そうか迷ったのですが、私がこのグループに加入したきっかけを話していなかったの、いい機会だと思いいここで話させていただきます。

あるひ、静かで穏やかな森の中。この森に住むくまさんが、昼寝をしようと寝転んでいると、向こうのほうから赤い頭巾をかぶった少女が歩いてくるのが見えました。ここは森の奥深く。少女のような小さい子が一人で通るのは危険です。おまけに近頃は乱暴なオオカミが出るという噂が、動物たちの間で囁かれています。

噂を思い出たくまさんは少女が心配になり、こっそり後ろから見守ることにしました。この森のくまさんは、とてもやさ

しいくまなのです。

そのまましばらく後ろをこっそりついて行っていると、少女はそこらへんに生えていたキノコをいきなりちぎり、かぶっていた真つ赤な頭巾をバッグ代わりに、キノコを詰め込み始めました。くまさんがとても驚いて見ていると、

「オオカミさんへのお土産にしましょ！」
という少女の楽し気な声が聞こえてきます。少女はオオカミという人へ、キノコをお土産にするようです。

そこでくまさんは、キノコの中に毒を持つものが混じっていることに気が付きました。オオカミさんが誤って食べてしまったら大変です。どうやって少女にそのことを伝えようか迷っているうちに、そこに生えていたキノコをすべてちぎり終わった少女が歩きだしてしまいました。

そのことにくまさんが気が付いた時には、少女の姿ははるか先。焦ったくまさんは、自分が人間からすれば恐ろしくまだということも忘れ、

「お嬢さん、お待ちなさい！」

と叫びながら、少女をものすごい勢いで追いかけていました。少女は、くまさんの必死な様子が伝わったのか、こちらを振り

振り返り止まってくれていきます。手に持った何か四角い機械をこちらに向けながら・・・

やっこのことで少女に追いついたくまさん。さっそく少女にキノコのことを伝えようとすると、少女が先ほどからいじっていた四角い機械をこちらに見せつけてきます。不思議に思ったくまさんは、「画面をのぞいてびっくり！」

何とそこに写っていたのは、ものすごく恐ろしい顔で追いかけてきている自分の姿だったのです。ショックで固まってしまったくまさんに、少女は追い打ちをかけてきます。

「この動画を猟友会に持ち込んで、あなたをくじよしてもらおうかしら？」

少女の言葉を聞いたくまさんは大慌て。親切心で少女を追いかけたのに、そのせいで自分がくじよされてはたまりません。あの映像を握られている以上、下手なことはできないのです。

え？少女を襲って動画を消してしまえばいいって？ いえいえ。うちのくまさんはそんなことはしません。だってとーっても優しいんですから。

「どうかその映像を消してくれませんか。」
くまさんは必死に少女にお願いします。すると少女は、

「わかった。この動画は消します。ただし、私のおばあさまに会ってもらった後にね！」

と、笑顔でくまさんに言い放ちました。おばあさまに会ってもらった後。という部分が少し気になったくまさんでしたが、動画を消してもらえることの喜びのほうが大きく、おばあさまの家へ向かうという少女の後ろのこのことについて行きました。

皆さんも薄々この後の展開はお分かりだと思うので、ここからの詳しい説明は省かせていただきます。赤い頭巾の少女がAkaで、おばあさまがMORI事務所の社長。威圧感のすごい二人に囲まれながら、『アイドルグループに、ちょうどあと一人ほしい』と思っていた『加入しなければ猟友会』と脅されたときは、自分の親切心を殴り捨てたくなるような気持ちでしたが、自分と同じように捕獲された OhGod と助け合い慰めあいながらここまで来ることができました・・・おや、もうそろそろ準備ができそうですね。それでは私のお話はここまでとさせていただきます。お付き合いくださり、ありがとうございます。

最後に宣伝をさせていただきます。今回のツアーイベント、きゅまもと公演のチケット予約が始まっています。抽選なので確実にゲットできるわけではありませんが、希望をもってご応

募ください。なお、チケットの悪質転売は絶対におやめください。そんなことしたら、こわーいくまさんと、顔がこわばっているオオカミさんと、返り血で染まったように赤い頭巾をかぶったとてつもなく笑顔の少女が後から追いかけてきますからね・・・

もなか

「あ…忘れてきちゃった…」

長い一日の授業が終わり、帰宅しようと校門を出た時、教室にスマホを置いてきてしまったことに気が付いた。

「アキごめん。教室に忘れ物したから先に帰ってて」

一緒に帰っていたアキにそう伝えると、眉尻を下げ、少し寂しそうな、困ったような表情を浮かべていた。そのまま「それって今日持って帰らないとダメ？」と聞いてくる。私は、アキが一人で帰りたくないだと気付いて申し訳なくなる。

「スマホ忘れてきたの。ごめん。」

「それは…持って帰らないとダメだあ。」

忘れたものを聞くと、アキは残念そうに肩を下げた。それから、「一緒に取りに行く！」と「先に帰っていいよ」の押し問答を何度か繰り返した後、アキはしぶしぶ帰っていった。

私はアキの後ろ姿を確認してから、学校に向かって歩き始めた。

(あれ、誰もいないのかな)

校舎に入り、廊下を歩いていても、教室の中をのぞいても誰にも会わなかった。いつもは女子生徒が残って話をしていたり、日直だった生徒が日誌を書いていたりと誰かが残っていたりするものだ。

人の気配がしない静かな学校は、普段と異なる雰囲気にかまれている、私は若干の違和感と恐怖心を抱き始めていた。

教室に入ると、目に入ってきた光景に驚き、動けなくなってしまうた。

「え…」

そこで、窓際の机に腰を下ろし、グラウンドを眺めるナニモノかの後ろ姿を見た。

ナニモノかは、この学校の男子生徒の制服を着ているが、この学校の生徒だとは一瞬も思わなかった。彼は、ナニモノかなのである。しかも、この世のモノではない。もっと神聖で尊ぶモノのように思えた。こんな現代の世俗的な汚れたこの場所は彼には似合わない。

そう思わせるほどに彼の周りの空気が澄んで輝いているのだ。サラサラな白い髪の毛は窓から入ってくる夕日に照らされてキラキラと輝いている。

私の声に反応した彼は、開いていたカーテンを閉め、ゆっくりと振り向きこちらを見た。

「なあ、きみ何をしにきたんだ？」

振り向いた彼と目が合う。彼が声を発したのは分かったが、内容が入ってこない。後ろ姿でお腹一杯だった私には彼の顔はキャバオーバーだったらしい。

その中で、まず目に入ってきたのは大きな目。金色の瞳の中には星が瞬いており、目を反らさせない吸引力があった。

小さな顔に、大きな目と点で描かれたような小さな鼻、白い肌によく映える桃色の薄い唇がバランスよく配置されていた。

美しい中性的な顔立ちは、女性と男性の性別を越える存在のように思われて、やはりこの世のモノではないと確信した。

そんなことをつらつらと考えているうちに彼が、どんどん近づいてきており、気づいた時には私の真正面に彼がいた。

「聞こえなかったか？ 何をしに来た？」

低い声が空気を揺らす。中性的な美人の真顔は強烈な威圧感

を放ち、周りの空気を張り詰めさせる。

「わ、忘れ物をした、から……」

私の声は情けないくらいに震えていた。白い彼はそのまま何も言わずに私の顔を見続ける。その時間は十秒にも、三十分にも一時間にも感じられた。永遠にも感じられる時間を終わりにしたのも彼であった。

「そうなのか！ ふむふむ、なるほど。あ！ これか？」

と突然笑顔になり、大声を発して私の引き出しから見つけたスマホを掲げてみせた。

今までの張り詰めた空気が無くなり温かいものに変わる。真顔だった彼の表情は明るく、無邪気な笑顔になって、私は神秘的なものが急に可愛らしくなったことへ戸惑いを感じていた。

彼は、私の探していたものを見つけたと分かると、うれしそうな表情を浮かべて、スキップでこちらに近づいてくる。

手に持ったスマホを渡そうと手を伸ばしたところで急に動きを止めた。すると突然こんなことを言い出したのだ。

「なあ、きみ今時間あるかい？」

「なんで掃除なの…?」

意味ありげに「手伝ってほしいことがある。」と彼に言われ一体どんなことを手伝わされるのだろうかと大きな不安を抱えながら、漫画のような非現実的な出来事に巻き込まれていくのではないかと少し期待してしまったことを恥じた。なぜなら彼が手にしていたものが、ほうきだったからだ。

もしかしてこれで空を飛ぶのではないかと一瞬思ったが、次にちりとりまで出されたためその可能性も捨てさった。

「だから、言っただろう。俺はほこりの精霊で、この教室があまりにも汚いから人の姿で、実体化してしまったんだ。うん。ホントは、ほこりが実体化なんてあってはいけないことなんだ。今はまだ深刻じゃないからこんな真っ白で綺麗な姿だが、このまま汚い状態が続くと俺はわるーいナニモノかになってしまう。人間を傷付けたくはない。だから、協力してほしい。」

なんて真剣そうに言っているが、さっきは「俺は、明日から転校してくる転校生なんだ。しかし、極度の潔癖症でなァ。だから先に掃除をさせてもらっている。」なんて言っていた。

「はあ、ほんとの事言うつもりないんでしょ。手伝うから何も

言わなくていいわよ」

最初は、第一印象の神々しさから、恐れながら彼と話していたが、今は気を使う必要がないと感じている。

それは、私の質問にふざけた答えしかせず、こちらに素を見せるつもりがないと気づいたからだ。真面目に付き合う方が馬鹿らしい。

「はは、申し訳ない」

少しも申し訳ないと思っていないことが分かり、ため息を吐いた。

私は、そのまま彼と話しながら掃除を続けた。彼は相変わらず机に腰掛けて、カーテンの隙間から外を眺めている。

「なあきみ、掃除のお礼を何かあげよう。」

ずっと掃除をせずに私と話していた彼が急にそんなことを言いだした。

「そうだなあ、悩み相談でもいいぞ。」

「え、なによ、急に。」

突然の申し出に戸惑ってしまう。彼がなぜそんなことを言い出したのか理解が出来ない。

「なんでもいいぞ。きみは何に悩んでいるのかい？ 例えば、お小遣いが少ないとか、勉強に疲れたとか、家族関係が上手くいかないとか。」

彼は、指を折りながら私が悩んでいそうなことを声に出しながら数えていく。悩み事は何かと考えたと私の頭の中はあの人のことはいっぱいになった。そう考えていると急に彼はにやりと笑いこちらを見た。彼の手を見るとちようど両手の指を折っていた。彼は最初に会った時のような澄んだ空気をまとい、まっすぐな瞳を私と重ねる。

「好きな人がいる…とか」

静かな教室に自分の息を吸う音が響いた。なんで急にそんなことをいうのだろう。好きな人がいるなんて誰にも伝えたことがないのに。好きじゃないと蓋をしてきた思いになんで気が付いているのだろう。

「なんでかって？ そんなのなんとなくさ」

そんなことを言われて体の力が抜けた。この世界の人間ではない彼は、きっと私の心の声も読めるのだろう。そんな諦めた

ような気持ちで彼の言葉に肯定の言葉を伝える。

「そうかそうか。」

彼は、そういつて私にこちらに来るように手招きをする。私は誰にも言つてこなかった気持ちを知られたことに驚き、呆然とした気持ちで彼の方へ歩いていく。彼はにやにやした顔で「驚くなよ」といつてカーテンを開けて見せる。

夕焼けのオレンジ色がまた彼の白い髪に反射する。眩しいと思いつながら外を見ると先に帰つたはずのアキが校門に立っていた。

「なんで…あんたが何かしたの？」

「俺は何もしてないぜ。まあ、何かといわれるとだな…。このカーテンを俺が閉めているときはこの世界の時間の流れは、止まっているんだ。だからきみがこの教室にきて俺と話し始めた時にはあの子はあそこで待っていたぞ。」

アキがゆつくりとこちらを見る。私がかこからみていることに気づくと笑顔で手を振つてきた。私の耳には、周りの音は何も聞こえなくなるが、アキの「はやく！」の声だけが聞こえる。

私は「いま行く。」と誰に伝えるでもなく呟く。急いで教室の扉に向かう。

「おいおい！これ！忘れてるぞ。」
と真っ白な彼がスマホを持ってきてくれた。

「あ、ごめん」

取りに来たはずのスマホを忘れていて、何をしに来たのだろう…。とうなだれる。

「どうしてきみは自分の想いを認めてあげないんだ。誰のモノでもない、きみだけのモノだ。誰に何を言われたって思われたって関係ないだろう？だから、きみはその思いを認めてあげてくれ。」

彼の真剣な言葉は、今までの自分を許してくれるような温かさを感じた。

「そうだね：私は私のために認めてもいいのかも。」

彼の言葉に目の前の視界が開けた気がする。軽くなった体はいつもより速く走れる気がした。

「掃除ありがとな！」

彼の言葉を背中に受けながら全速力で廊下を走る。最後に見た夕日に当たってきらきら輝く真っ白な彼の姿はだんだん思い出せなくなっていた。

僕の話

人馬宮マサ

刃と刃がぶつかり合う度に火花が何度も散る。淑女と同じ白く輝く刀身が大きく弾かれ、水縹色の瞳が小さく見開かれた。迫る細い刃を淑女は紙一重で避け、刀の柄を強く握り直す。淑女は地面を這う蛇の如く身体を低くし、目の前の『獲物』に近づく。

「っ……!!」

『獲物』と見なされた青年は、淑女の殺気を感じ取ったのか一歩足を引き、真正面に剣を構える。

青年が勝つか、淑女が勝つか。勝敗は一瞬にして着く……勝負を見守る誰もがそう思っていた。ほぼ同等のタイミングで互いの首もと目掛けて刀身が伸びる。

「そこまで!!」

張り詰めた空気がその一声で破られる。……首もとすれすれ

で互いの刀身は止められていた。

「……あゝあ。今回も引き分けかあ」

「相変わらず目で追うのが精一杯だったよ、マサさん」

マサと呼ばれた白髪の淑女は照れくさそうに頬を掻いていた。「お姉ちゃんやお兄ちゃんに比べたら、まだまだだよ。それより、クルフィさんも初撃が重くなってきたよね！僕、刀弾かれちゃったよ」

「僕も兄者達に指導してもらってるからね」

先程の空気とは真逆なほのぼのとした空気が漂う。そんな二人の様子を、縁側から微笑ましく眺める者達がいた。

「……マサちゃんの事だけだよお……昔はよくマミやマコの後ろくつついてたのにさ、随分強くなったなあ」

うんうん、と一本角の生えた男の隣にいた顔に傷のある男も頷いていた。

「上二人の存在の影響なのだろう。……それでも彼処まで強くなるとは少々見くびっていたが……その内、クルフィから一本取るだろうな」

兄者、と隣にいた白い鱗肌の青年が尋ねる。

「兄者もですが……シンさんも、マサさんの昔をご存知なので

すか？」

「おう、勿論知ってるぜ。昔からよくマミとかと遊んだりとかしてたからな。な？ グラス」

「ああ……六道家が面倒事に巻き込まれているのな。思えば……マサが強くなろうと決意したのは、『あれ』がきっかけなかもしれんな」

あれかあ……とシンは懐かしげに呟いていた。

「他に思い当たるのもねえからな。もうあれから何年経ったかねえ」

「どうだったか……マサがまだ十歳に満たない頃じゃなかったか？」

「あの、『あれ』とは一体何なんです……？」

すると話し込んでいた三人の頭上がふと暗くなった。

「マミさん。マコ君」

マミと呼ばれた淑女は中庭にいた二人を一瞥してから三人……というよりシンとグラスを見下ろしていた。

「……人がちょっと離れていた隙に、一体何を思い出していたんです」

「相変わらず凄い聴力だな……話していたのは、マサが強くな

ろうと決意したかもしれないきっかけについてさ」

そうそう！ とグラスの言葉に同意するシン。

「懐かしいな……って話し込んでたんだよ！」

「……確かに懐かしいですが……正直、『あれ』は忘れていてほしいのですがね」

幼馴染であるというマミ、シン、グラスの三人はまたも色々語り始めた。

「あの……マコ君。マミさん達の言ってる『あれ』って何の事かわかります？」

「あー……そっか、ソルベさん知らないのも無理はないよね。何年前だったかな……姉さんが十八歳で、マサがまだ八歳だった時の事なんだけど——」

◇
◇
◇

……マサはまだ屋敷の中庭位までの景色しか知らなかったんだ。幼いマサにとって、外はまだ危ない場所だって父さんや母さんがよく言っていたし、……マサの身体は俺達と違って色素を持たなかった。もしもの事を考えると大きくなるまで屋敷の

中の世界しか知らない方が幸せなのかもしれないからさ。
でも本人は外の世界に興味を持ち出すに決まってる。そんな
中、姉さんがある提案したんだ。

「その提案って？」

確か……俺と姉さんや護衛人とかでマサを守るのはどうか、
だったかな。俺はまだ完全に異能に目覚めてはなかったけど、
姉さんは術式とかも完璧に安定してたからね。それなら安心だ
ろうって事でマサは初めて外に出たんだ。

「絶好のお散歩日和だな、マサ」

「うん！」

マサはニコニコと笑っていた。初めてのお散歩が楽しみで仕
方なかったんだろう、キョロキョロと外の景色をずっと見回し
ていた。彼女にとって、見るもの全てが新鮮なものばかりだっ
たのだ。

「マサ、しっかりとマコと手を繋いでいてね」

そうマミが目線を合わせて優しく声をかけると、マサは空い
ていたもう片方の手をマミへと伸ばした。

「お姉ちゃんとも繋ぐ！」

「……しようがないなあ」

マミはふっと微笑み、マサの小さな手を握った。

「マサ、何かあったら直ぐにお姉ちゃんやお兄ちゃんを頼りな
さいね。それか他の大人でも大丈夫だから」

母のサクラの言葉にマサは「はい！」と元気よく返事をし
た。

「マミ、マコ。……お願いね」

こくりと二人は首を縦に軽く振った。その様子に安心したの
か、サクラは微笑んでいた。

「それじゃあ、三人とも！ お散歩楽しんできなさい！」

俺とマサにとってはお散歩だったけど、姉さんだけちよつと違
ったんだよな。

「違ったって……一体何が？」

「……姉さんは次期六道家の管理人候補者だったから、毎日色
んな修行してたんだ。勿論今回のお散歩も——」

「——マサさんを守ること？」

「察しが良いね」とマコは苦笑し、続きを語り始めた。

俺と姉さんの他に、何人か母さんの式神が着いてきてたんだ。

何でだろうってあの頃は思ったけど、今ならわかる。あの式神
達は護衛もだけど、姉さんに稽古をつける為に着いてきてたん

だって。

「ちなみになんですが……お散歩には何処へ？」

「ハナミさんが作ってくれた花畑。家から森を抜けてちょっと歩いてすぐの所」

「ああ……」とソルベは相づちを打った。「彼処なら何も危険は無かったでしょ？」とソルベは訊ねたが、マコは黙りこんだ。

「……マコくん？」

「……それでもなかった。道中が安全じゃなかったんだよ」

◇
◇
◇

子供の足じゃずっと歩き続けるのだって限界がある。だから一旦休憩を挟むことにしたんだ。……道中の森の中でね。

「マサ、疲れただろ。ほらマサの好きなクッキー持ってきたぞ」

「わあ！ ありがとう、お兄ちゃん！」

俺はマサの面倒を、姉さんはその間に着いてきていた式神と剣術の稽古。まあ、何があっても咄嗟に対応できるようにだったんだと思う。

「ねえねえお兄ちゃん、お姉ちゃんの刀って真っ黒だねえ」

「そうだねえ」と相づちを打つと、マサは尚も目を輝かせつつ言った。

「僕も、お姉ちゃんやお兄ちゃんみたいにカッコいい刀持てるかなあ？ お揃いの色の、カッコいい刀！」

マサは幼い頃から俺達に強い憧れを抱いていた。勉強とかも俺や姉さんがやっているのを見て、自分も挑戦してみたいというような好奇心旺盛な子だった。

「……兄ちゃん、マサは白い刀が似合うと思うんだけどなあ」と呟いたら「黒が良いの！」と怒られた。今はもう気にしてないみたいだけど、マサは昔『白色』が嫌いだったみたいなんだ。理由が「お姉ちゃん達とお揃いじゃないから」って。……まあなんとも可愛らしい理由なこと。

「あつ」とマサが声を上げた。その声につられて視線の先を見れば、黒刀が槍を全て弾き飛ばしていた所だった。

「お見事でございます、マミ様。もう我々のような式神の指導など必要ございませんまい」

「……ううん、まだまだだよ」とマミは刀を鞘に納めつつ呟いていた。

「お姉ちゃん！」

マサが駆け寄ってきているのが見えたマミは、鞘を式神に預けてから姿勢を低め、マサを抱き止めた。

「お姉ちゃんすごいよ、大人に勝てちゃうんだね！」

「……そんな事はないよ。私なんてまだ同じ土俵にすら立ててないんだから」

「あ……」とマコは小さく呟き、マミの手をとった。

「姉さん、怪我してる」

「ちよつと擦りむいてるだけよ。大したことないわ」

「ダメっ!!」とマサが声を上げた。その様子にマミとマコが驚いて固まっている間に、マサは二人の手をとった。

「……マサ？」

「二人とも見ててね……!!」

マサの両手から温かな光が溢れ出す。やがて光はマミの手を包み、傷ついていた患部を何事もなかった状態へと戻していた。

「っ……マサ、母さんと同じ治癒術が使えるのか!？」

「……? うん。今ね、お母さんと練習してるんだ! お姉ちゃん、もう手は大丈夫?」

「……ええ。ありがとね、マサ」

優しく頭を撫でてやれば、マサは照れくさそうに笑っていた。

「……」ふとマミはマサの頭を撫でていた手を止め、ゆっくりと立ち上がった。

「……姉さん？」

マミは何も答えず懐に備えていた小型のナイフを取り出した。「マコ、ごめん!」とマミはナイフで何かを弾いてからマサを抱えて謝り、マコの肩口を踏み台にしてから宙を舞った。

「う、おっ!？」

「おうおう……今のを避けますかあ……流石、次期六道家の管理人候補者だ」

茂みからは五、六人程度の狼の獣人が姿を現してきていた。

……その内の何人かの足元には見覚えのある式神達が転がっている。

「……どちら様でしょうか」

「牙狼組……と言えば、わかってもらえるかな? しかし……残念だったねえ、お坊っちゃん。候補者様は妹様の方を優先したみたいだ」

恐らく大将であろう男の隣から先程刀を預けていた式神がゆ

つくりと倒れた。しかしそんな事を気にもせず男は恭しく挨拶を始める。

「初めまして、六道のアルビノお嬢様……俺は牙狼組の組長、ガロってんだ。あんたのその呪力を見込んで、うちの組に招き入りたい！」

「招く……？ 拐かすの間違いでしょうよ」

右腕に刺さっていた細い針を引き抜き、マコを捕らえていた狼へと投げつける。

「ひっ……！」とか細い悲鳴と共に拘束が緩んだ。マコは咄嗟に足元を踏みつけ、拘束から抜け出しマミの元へと駆け出した。

「マコ……！」

「！」僅かに姉さんの口が動いた気がした。すれ違うタイミングでマサを受け取り、そのままの勢いで気の幹に飛び乗る。

「姉さん無理はしないで……！」マコはそれだけ伝えると幹から次の幹へ軽々と伝い始めた。

「お兄ちゃん待って！ なんでお姉ちゃんをおいていくの……！」

「後で話すから、今は逃げるぞ……！」

「逃げたか……まあ、何処に行くかは見当はつく……休んでる暇はねえぞ、狩りは楽しんでもん勝ちだ！」

ガロの一言を合図に部下達が走り始める。

「——休んどけっての」

懐に忍び込むようにマミは一人の腹に蹴りを入れ、後ろへ飛ばす。勢いは殺さず、そのまま幹の太い枝を拾い上げ、盗られた刀の代わりに振るう。

「おいおい……刀を取り返しに向かってくるかと思ってたのによお……何で倒れてるのはうちの組員たちなのかね？」とガロは舌打ちをした。

◇ ◇ ◇

「お兄ちゃん、お兄ちゃんってば……！」

グツと襟元を引っ張られた。驚いてマサの目を見れば、水縹色をした瞳が潤んでいる。

「なんでお姉ちゃんをおいてきちゃったの……？ それに……あの牙狼組って、なんなの？ 僕を招くとかいってたけど……」

「マサ」とマコはゆつくりと屈み、紅桔梗色の瞳にマサの姿を映した。

「……まだちゃんと理解しなくて良い。でも兄ちゃんの話、聞

くだけ聞いておいてくれ。さつき……姉さんの手の怪我を治しただろ。大抵の獣人は、治療術なんて使いたくても使えやしない。牙狼組とか、ああいった悪い奴らにとって、マサは喉から手が出る程の存在なんだ。……ともかく、今は家まで逃げなきゃ――」

カサリと何処かの茂みが揺れた。まさか追手か？ マコの背中にヒヤリと冷たい汗が伝う。二人の警戒が強まるなか、音は止まることを知らずどんどんと近づいてくる。

「！」茂みから出てきたのは黒蛇だった。

「お前……もしかして、姉さんの使いの蛇か？」

言葉が通じているのかはつきりとしませんが、黒蛇は此方を見つめていた。マコは意を決して、もう一度蛇に訊ねる。すると蛇はふるふると頭を横に振っていた。

「違うみたいだよ？」

「……いや、間違はなく姉さんの使いの蛇だ。大方、こっそり着いてきてたんだろ。そんな事より、姉さんならあっちの方にいるぞ！ 俺達は急いで家に――」

「待つて」とマサは屈み、黒蛇と目線を合わせた。それと同時に、黒蛇は頭をまた振り始めた。

「……ついていけばいいの？」

「マサ、待つて！」

マコの制止も聞かず、マサは黒蛇の後をついていくように歩み始めた。蛇は時折後方を確認しつつ、地面を這っていく。

やがて二人の前には小さな洞穴が現れた。蛇は入るように頭を振って示した。……が穴は随分と小さく、子供一人しか入れないような大きさであった。

「っ……」

（隠れるにはもってこいの場所ではある……でも、俺は入りきらない。となると……やつぱり、家に戻って応援を呼ぶしか――）

「お兄ちゃん」と呼ばれた。ハッとして我に返ると、マサが真剣な表情で此方を見ていた。

「僕を担いでお家に戻るより、お兄ちゃん一人の方が動きやすいでしょ？ ……僕なら大丈夫。お姉ちゃんのお友達もいるから、だから……早く！」

悩んでいる時間は無いに等しかった。

「……ッ……マサ、兄ちゃんと一つだけ約束してくれ。絶対ここから動かないって。兄ちゃん、すぐ家に戻って応援を呼んでくるから。いいか？ 絶対だぞ」

差し出された小さな白色の手は震えていたのに気づいたマコは離れる前に、もう一度だけマサを強く抱きしめた。

「……じゃあ、兄ちゃんちよつとだけ行ってくるな」

そう言っただけ出したマコの脳裏に、ふとあるものが浮かんだ。
(そういえば……あの細い針みたいなの、何だったんだ……？
姉さんが俺を助けるときに投げたとき、部下の奴は随分と怯えてたけど……)

◇
◇
◇

持っていた杖が宙を舞い、地面へと突き刺さった。

「……マジかよ……この人数を一人で捌くかね、普通」

ガロは転がっていた部下の背中を蹴りあげた。

「休んでる暇はねえって言っただろうが。獲物を奪った褒美に転がってる奴ら始末しとけよ」

刀を渡された部下は小刻みに震えていた。そんな様子に呆れたガロは「ルルー！」と別の名前を呼んだ。

「お前は違うよな。俺は逃げた獲物を追いかけるからよお、そいつの相手頼むわ」

「勿論です、ガロ様」ルルーと呼ばれた狼は直ぐ様刀を奪い取り、先程まで刀を持っていた部下の腹部に自身の持っていた剣を突き刺した。

「！」

ルルーは次々と倒れ伏していた部下達を容赦無く切り捨てていく。その様子を呆然と見つめていたマミの横を黒い何かは横切った。

「……」目線だけをずらして見れば、自分の刀が突き刺さっていた。頬から垂れた血を軽く拳で拭ってからマミは刺さっていた刀を抜いた。

「……どういうつもり？」

「安心しろ。……貴君の兵を殺せとの命令は出ていない故、従ったまで」

一呼吸置いてマミは刀を握りしめ、「外道が」と小さく吐き捨て地面を蹴った。一撃。二撃。相手が反撃する時間を奪うように、マミは刀を打ち込んでいく。

「チツ……！！」

剣を弾き、ガロを追うように駆ける。勿論ルルーはそれを許すはずも無く、二人の間に割り込むように剣を突き入れる。

「退けっつての」

容赦なく肩口を斬りつけ、再びガロを追いかけ始める。

「ルルー、いい加減ソイツを黙らせろ！」

「承知」

視界の端に剣の切っ先が見えた。刀で受けきれないと判断したマミは咄嗟に地面を蹴って後ろへ下がった。

「ッ！！」鋭い痛みが顔面に走る。警戒を保ちつつ痛む箇所 hands を添えてみれば、赤い液体が付着していた。

「……しくじった」幸い眼球に傷が入ったわけではない。少しばかり視界が狭まっただけなのだから。直ぐ様気持ちを切り替えて刀を水平に持ち直し、剣へと叩き込んだ。

「なっ……!!?」

(折られた……? いや違う! 剣自体を刀で切ったのか! 鉄製だぞ……こんな事がある——)

ヒュウと息を吸う音が聞こえた。対象に意識を戻せば、ガロ様の背中を射抜くかのように刀を構える姿が見えた。

「っ、待て!!」

ルルーの制止を振り切って、マミは刀を思いきり投げた。

「ガロ様！」

「あ？」振り返ったと同時に肩口を刀がかすった。

「っ、このクソガキ……!!」

ガロが威嚇するにも関わらず、マミは怖じけることなく確実に距離を詰めていく。それどころかルルーに肩を掴まれても無表情で後方へと投げ倒す。

「……ルルーは投げ飛ばした位じゃくたばらねえぞ」

「……その喧しい喉笛、喰い千切られたくないならとつとと失せろ」

「嫌だね。良いじゃねえか異能持ちの一人や二人位よお！」ガロは悪びれる様子もなく言い放った。

「黙れ!!」

「まあ落ち着けて!! 焦る気持ちもわからん訳じゃねえからよ」

ガロはグツとマミの手首を引き、眼前に細長い針を突き付けた。

「見覚えあるだろ? ……呼吸困難を引き起こす毒針だよ。初手はお嬢様を狙ったんだが、まあ正解だったわけだ。部下の何人かに試してみたんだが……あんただけだぜ、立ち上がったままなのは。毒に耐性でも持つてるのかは知らんが……根性試しと

「頭部に強い衝撃がかかり、受け身もろくに取れず地面に転がった。」

「ッ……!!」

「おいルルー、今六道様の根性試すところだったのによ……」

「申し訳ありませんガロ様。少々私情を挟みます」

衝撃が強すぎて身体が直ぐに動けそうになかった。揺れる視界では泥だらけの腕に細長い針が刺さっていた。

「六道。貴様は剣士だろう。それがただ投げ飛ばして終いだと……？ 甘く見られたものだな。貴様にとって私は刀の錆にもならんような相手なのか!?」そう言っただけでルルーは落ちていた黒刀を握り、マミの首筋へと押し当てた。

「い、ッ……!!」首筋から生暖かいものが滴る。毒針が刺さった方の手を容赦なく踏まれ骨がミシミシと嫌な音を立てた。「普通ここまで痛めつけられた奴の眼は死ぬんだがなあ……何でまだそんな顔ができるのかねえ」

「知……るか……!!」

「……ガロ様、彼方を」

ルルーの目線の先を向いたガロは随分と楽しそうに笑った。

「……おめでとうさん、六道様。あんたが大切に守ろうとしてたお嬢様のご登場だ!」

「……なんで……戻ってきた……!!」

「何でだろうなあ? 本人に直接聞いてみるとするかあ」

「待て」と起こした身体はルルーに掴まれ動けなかった。逃れようともがく間にもガロはマサへと近づいていく。

「待て……止まれッ、ガロ!!」

「よお、お嬢様……また会えて嬉しいよ」

「マ、サ……!!」ああ、クソ! 息が、整わない。視界がぼやけて最愛の妹の姿が見えない。

「流石に気絶したか。まあ、耐えた方だな……それよりも聞いてくださいよ、お嬢様——」

ガロがマサへと視線を戻した時には、マサの姿はそこには無かった。

「あ!? 何処行きやがった」

「その手……離してください!!」

「……」ルルーは無言でマミの服の襟を持ち上げ、まるで物を

扱うかのように後ろへ投げやった。

「！」

それを見たマサは慌ててマミの身体を支えに走った。「あ痛……！」白い手に真つ赤なものが付いたが気にしてはいられなかった。

（どうしよう……！ いっぱい怪我してる……全部は治せない、治したら僕も動けなくなっちゃう……酷い所だけ治さないと、血がいっぱい出てる所……！！）

かくりとお姉ちゃんの身体がずれて首筋から滴るものが見えた。マサは背伸びをして首筋へ手を伸ばし、温かな光を当てる。

（今度は顔の——）

「へえ！ 本当に治ってらあ……この程度ならまだ治せるもんなんですかね？」

「触らないで！！」と叫んだがガロは気にせず話し続けた。

「お嬢様……いいこと教えてあげましょうか。あんたが大事に想ってる六道様……毒をくらってましてね。呼吸困難だけじゃない、徐々に身体が硬直していく毒だ。試した部下はことごとく死んでいったんだが、この人は思うように身体が動かせないなか、うちの部下を気絶させたんですよ……気絶させるっての

は、相当の技術が必要なんだが……あんたなら、この状態も治してやれるんだろ？」

ガロの言葉にマサは狼狽えた。「おい」と声を掛ければ、小さく肩が跳ねる。

「まさか解毒が出来ないなんてぬかすつもりじゃねえだろうな？ 甘ったれた事抜かしてんじゃねえぞ！」

「っ……ッ……！」ポロポロとマサの瞳から涙が溢れ始める。

「おお、今のうちに泣いとけ！ うちの組に入った時にゃ、そんな余裕もなくなるからな！ 治癒術だけじゃなくて蘇生も得られるかも——」

ゲホツ、と咳き込む音が聞こえた。……耳を澄ましてみれば、先程気を失っていたはずのマミが浅い呼吸を繰り返している。

「……おいおいマジかよ、猛毒くらったっていうのに息を吹き返しやがった！ とんだ逸材だな！？ こいつとガキがいれば実験が無限に出来るじゃねえか、ここまで頑丈な奴今までいたか！？ お前ら最高の姉妹かよ！！」

「ガロ様」

「ああいけねえ」とガロは掴んでいたマミの襟元から手を離れた。

「はっ……っ、は……」

潤んだ水縹色の瞳と目が合った。「……大、丈夫……だから、ね……」と息切れをしつつ伝えれば、マサは唇をキュッと引き結んだ。

「……どう、されますか？」

「死なん程度に痛めつける。そうすりゃお嬢様も治癒術を使いきるはずだ」

「マサ……」と僅かにマミの口が動いた。

「残りの治癒術は……自分の為に、取っておいて……ほしい。」

正直、私に出来ることはもう——」

バキン、と嫌な音がした。右腕をルルーに背もたれにしていた木に蹴りつけられたのだ。

「ッ！！」

「お姉ちゃん！ う、わっ！？」

急に地面から足が離れた。視界には赤い液体が付着した黒刀が見える。

「自分が囨にでもなるつもりだったのか？ だとしたら貴様の采配は間違っていたな。……死んだ方がましだと思う、地獄のような日々が始まるぞ」ギリリと黒刀が真上に掲げられた。

「——そうは問屋が卸さねえよ」

振り下ろした刀が弾かれた。動揺したルルーの手から離されたマサを痛む身体に鞭打って受け止めて地面を転がると同時に、青白い電流の槍が流れていく。

「何が起きて……！？」そう呟いたガロの喉元に槍が突きつけられた。

「お姉ちゃん！！」

「……！！」

「よお、マミ！ よくここまで頑張ったな。後は俺達に任せな！！」

揺れる青空のような長い髪。陽の光に照らされ輝く一本角。そして自分と同じ朱の混じった黒髪と周囲に散る青白い電流。

「シン……それにグラスさんまで……何で……」

「屋敷に伺ったら出掛けたというのをサクラさんから聞いてな。私達も向かうかと話していたら、君の弟が慌てた様子で帰って来て、事情を聞いて駆けつけた……という訳だ」

「しっかしまあ……女相手にここまでするかね、普通。顔にも

よお……傷つけるたあ、良い度胸してんじゃねえか。てめえらも同じ目に遭っても良い……そう捉えて良いんだよな」

「動くのは止しておいた方がいい。感電死したくないのならな」「大王様」と呼ばれ、木槌を構えたままのシンが振り向いた。

「倒れていた六道様の式神達に、命の別状はありませんでした。ただ……牙狼組の者達は、もう……」

「……そうか。とりあえず負傷した式神達を先に荷馬車で運んでおいてくれ。俺達はマミの手当てが済んだら六道家に向かう！ それと、弟くんは妹ちゃんが居たってことも伝えておいてくれ」

シンが指示を出している間、グラスは着物が汚れるにも関わらずマミに触れた。

「マミ……酷くやられたな。今から運ぶ、少し揺れるが辛抱してくれ」

「あつ、ま、待ってください！！ 頭の出血を止めてから！」
言うが早いか、マサはマミの頭部を光で包み始めた。「……一体何を——」そうグラスが口を開いたその瞬間——

空気を切り裂くような高らかな指笛が森に響いた。それに合

わせて茂みから二頭の狼が大地を駆ける。

「くつ……全員避けるろ！！」

「……ろくなことしねえな、最近の新参者は」皆が混乱しているなか、冷静にシンは呟いた。

「俺はなあ、知らない事がまだまだ沢山ある。だ、か、ら……好きなんだよなあ〜こういう展開！」

「お嬢様は解毒が出来ないみたいだが、荒療治で治療術が覚醒するかどうか！ 試してみようじゃねえか、ええ！？ お嬢様に穴を開けるか、道を開けるか……好きな方を選ばせてやる！ ルルー、お前は今すぐ俺の荷物を運べ」

ルルーは無言で頷き、その場から離れようとしたが青白い電流が弾けた。

「次に足を動かしてみな、あんたタダじゃ済まないぜ。グラスに消し炭にされたくなかったら動くな」

シンはそれだけルルーに忠告し、ガロへと近づく。それを見たガロは愉快そうに針をちらつかせた。

「あんたはお嬢様に穴を開けたい派か！？」

「……いいや？」

「カッコいいじゃねえか……なら話も早い！ とつとと道を開けろ」

「それも断る」とシンは気だるそうに答えた。

「聞き分けが悪い野郎だなあ！！」

シンは呆れたようにため息を吐き、構えていた木槌を下ろしてからこう言った。

「俺は聞き分けは良い方だぞ。俺とグラスの幼馴染で……もつと諦めが悪くて、執念深いつたらありゃしない奴ならいるんだがな……」

ジャリ、と踏みしめる誰かの足音がした。後ろを振り返ってみれば、ふらつきつつも、地に立つマミの姿があった。

「は！？ お前つ、何で——」

「……悪かったわね、執念深い奴で」

「褒め言葉だよ」

マミとシンは不敵に笑った。

「おい……今、お前の根性はどうでも良いんだよ！ 大人しく寝てればいいんだ……それとも、見届けたいのか？ お嬢様が苦しむ姿をな！！」

高々とガロの手が振り上げられ、鈍い音が聞こえた。

「……ッ……？」 恐る恐る瞑っていた目を開いた。視線の先にはマミの手がガロの手を何食わぬ顔で受け止めていたのだ。

「お前……真正正銘の馬鹿か！！」

「……お陰様で。感覚が麻痺して痛みも感じないのよ。それと……蛇つてのは……アイツが言ったように、執念深い」

その言葉と共にマミの周囲にパチ、パチと黒い電流が走り始める。

「さっき私が言った事、覚えてるか？ その喉笛、喰い千切られたくないならとつとと失せろつて」

（……？ 待て、アイツの顔……あんな炎みたいな痣なんか——）腕に鈍い痛みが走った。慌てて視線を下げれば捕まえていたガキが腕に噛みついていたので。

「このつ……！ 離しやがれ！！」

「わ！？」

身体が宙を舞った。今度こそ地面にぶつかる……！ そう思っていたが、柔らかな衝撃に包まれた。

「……よく頑張ったな」

「えっ、と……お姉ちゃんのお友達の……」名前を思い出している、お兄さんは「ああ」と呟いた。

「すまない、自己紹介をしていなかったな。俺の名前は天峰グラス。あつちの一本角の奴は、星宮シン。さっきも言ったが……君のお兄さんに事情を聴いて、お姉さんを助けに来たんだ」

「さて……どうする？ 大人しく撤退するか、咬まれてから撤退するか。特別に選ばせてやっても良いわ」

「はっ！ 誰が撤退なんかするものか。ここまでしてくれたんだ……逆にめえを喰い千切ってやるよ……！」

ガロがマミへと牙を向けたその瞬間——ゆらりとマミの影が揺らいだ。

「……カグチ。事前に出て来るなど言っておいたはずよ」

「申し訳ありません……不安に駆られてしまったもので」

「素直で結構。……正直、助かった」

足元から現れた大蛇の咆哮と共に軽やかに地面を蹴った。

「——失せろ」

◇
◇
◇

「あくあ、こりゃ顔面の骨逝ったんじゃないのかね。さて、側近さんよ。もう抗えるのはあんたしかないぜ？ どうするよ」

「さっきの……狼二頭と負傷した部下で帰れるでしょ……まだ間に合うはずよ」そうマミが口を開くと、「マミ」とグラスが呼んだ。

「牙狼組の奴らは全員致命傷だそうだ。……どう足掻いても、無理だろう」

「……そっか……」

「……おい！」とルルーが吠えた。

「毒に蝕まれている貴様が何故心配をする！ それとこの周囲の電流を何とかしろ、ガロ様を介抱せねばならん」

「冷たい野郎だな……大勢の部下が殺されたつてのによ、こういう展開つてのは報復が付いてくるものだろう？」

そうシンが警戒するとルルーは面倒くさそうに顔をしかめた。

「……私の部下は私が殺した、それでこの話は終いだ。後は六道に聞いたらどうだ？ 流暢に喋られるかどうかは知らんが」

ルルーは気絶したガロを抱え上げ、踵を返し始めた。「……待て」とマミが声を張り上げた。それでもルルーは止まらず歩み続ける。

「もう二度と、私の家族を狙わないと言え！！ 今ここで、ハッキリと！！」

「……下らない。子供と蛇は嫌いなんだ、二度はない!!」

……左手が燃えるように熱い。呼吸が、未だに上手く整わない。最早立っているのか地面に転がっているのかの判断もつけられない。

「マミ! もう大丈夫だ、そう警戒しないでいい。気を張りすぎだ……念のため、俺とシンが周囲を見張るからお前は——」

「カグ、チ……針、気をつけて……」

「!」ガラスは咄嗟に腕を伸ばし、膝から崩れ落ちたマミを支えた。

「今度は力を抜きすぎだ! 妹の不安を取り除きたかったんだろ」

「わ……かって、る……」

マミの身体は痙攣を引き起こしていた。……予想以上にまずい容態なのは一目瞭然だった。

「シン! 添え木を持ってきてくれ!」

「はいよ。……マミ、ちょっと痛いかもしれないけど腕を先に固定するからな。針の方は、荷馬車に着いてからになるけど……もうちつと頑張れるか?」

「二人、とも……ごめ……」

「謝るぐらいならグラスに寄りかかっとけ」とシンに言われ、軽く頭を押された。

「……悪かったな、俺らの方こそ疑って。お前案外喧嘩っ早いからよ、全部お前がやったもんだと思っちゃまった」

「お前はこれ以上無いほどやってくれた。大丈夫……弟も妹も無事だ、皆で帰るぞ」

◇◇◇

「……マミ? マサ? マコ? 三人は何処にいるの!？」

「申し訳ありません……気がついたときには、ここに運ばれていましたので詳しいことは……」

「そんな……!!」そうサクラが青ざめていると、横から誰かが彼女の肩を叩いた。

「サクラさん。三人はグラス君とシン君達が別の場所で匿っているみたいだ」

「ヒイラギさん……それは、無事ってこと?」

ヒイラギと呼ばれた男はこくりと首を縦に振った。それを聞いたサクラは「よし!」と洋服の袖をまくった。

「ここで全員治癒するわ。……皆が安心して帰ってこれるよう
に！」

「マサー!!」

「お兄ちゃん!」と呼ぶ前に強く抱きしめられた。

「良かったあ……!! 洞穴の中にいなかった時は、心臓止まるか
と思っただよ……!」

「……ごめんなさい」

そうマサが謝ると、マコは尚も妹を強く抱きしめた。……そ
の和やかな空気に割り込むように、シンが声をかける。

「マコくん、今……少しいいか?」

シンはマコの身長に合わせて、彼の耳元で囁いた。

「!」マコは一瞬だけ顔を歪ませ、ゆっくりとマサから離れる。

「……マサ。ちよつとごめん、すぐ戻ってくるから」

それだけ伝えると、マコは急いで先頭の荷馬車へと走り出し
た。

「……ちゃんと飲んだな。呼吸を意識しつつ、もう一回するぞ」

グラスの数を数える声と共に、弱々しい呼吸が荷馬車の中に

響く。

「姉さん!!」

「! マミ、弟がやって来たぞ。呼吸を意識しながら聞いてやれ」

「あの! 姉は……大丈夫なんですよね!?!」

「正直わからない」とグラスは無慈悲にもマコの問いに答えた。

「ゆっくり呼吸をさせてはいるが……毒のせいかな、酷くなる一
方だ。まだ意識はあるが……」

グラスの話の途中にも関わらず、マコはマミに駆け寄った。

(毒……!! やつぱりあの時の針が……)

「マ、コ……ご、めん、ね……」

震えた手が頬に添えられた。

「姉さんが謝る必要なんか無い! 俺がもっと早く動ければ、
こんな事には……俺……俺、姉さんに何て言ったらいいかわか
らないよ!!」

クスッと小さな笑い声をした。「マコ……マサ、を……お願い、

ね……」途切れ途切れの優しい酷な言葉が与えられ、頬に添え
られた手がするりと落ちた。

「ツ……!! 姉さ——」

「ツ……!! 姉さ——」

スウ、スウ……と微かだか規則的な呼吸が聞こえた。マコは

恐る恐るマミの顔に、耳を澄ませた。「……寝てる……？」

「……よし、薬が効いて眠ったな。俺達も出発するでしょう」

「えっ、あ、あの……シンさんから、話したいことがあるなら今の内について言われたんですけど……」

それを聞いたグラスは呆れたようにため息を吐いた。

「あの馬鹿……一言二言足りん奴だ。先程睡眠薬を飲ませたから暫くは起きないぞ……という意味で伝えてくれと言ったはずなんだが……それでも、さっきも言ったように安心は出来ない。サクラさんが頼みの綱だな」

「よ………かつたあ………」

「……君たちは、マミに大事にされているな。俺にも弟たちがいるが……ここまで絆が深い姉弟を見たことがない」

ふとマミの顔に目をやったグラスは少しだけ目を見開いた。痛々しい傷痕こそ残ってはいるものの、出血がピタリと止まっている。

(………そうか！あの時マサが出した光………あれのおかげで、マミは動けていたのか)

顔を切りつけられ、毒を喰らっても尚立ち上がり続けたのは………彼女自身の精神力と、妹の尽力あってこそ出来たものだ

ったのか。

「………本当に大した奴だ」

「ホントだよな」と荷馬車の入口からマサを抱えたシンが顔を覗かせた。

「シン！お前………不安を煽るような言い方をするんじゃない」

「えっ？あ………もしかして俺、間違った伝え方した？」とマコに尋ねてみれば、マコは顔を赤らめつつ何度も首を縦に振った。

「いやー、悪い悪い！グラスの野郎が真剣な面して言ってくるもんだから、つい………」

「俺を巻き込むな。それより、何をしに来たんだ？もう次期に出發するんだが………」

「ああ、俺じゃなくてな。妹ちゃんがマミに用があるらしい。な？」と首を傾げて反応を伺ってみれば、マサは恥ずかしそうに頷いていた。

「………もう、何も怖がる必要はないと思ったんです。だから——ここで、治療します」

それを聞いたマコは「………っ、ダメだ！万が一があったらど

うするんだよ！」とマサを咎めた。

「……今使わないで何が力だっていうの？ このままだったら、僕は……お母さんと同じ力を嫌いになりそう。ワガママなのは分かっている……でも、僕の体力より……お姉ちゃんの命の方が大事だもん！！」

「……そこまで言われては仕方ないな。シン、外の方は任せて良いか？」

「おう、別にいいぜ。お前は妹ちゃん達と寝てる奴のお守りを頼むわ」

ヒラヒラと手を降りつつ、シンは荷馬車から降りていった。

「マサ……まだ治癒出来る程の呪力は残っていきそうなのか？」

「多分大丈夫！ 仮に尽きちゃったとしても、もうお家に帰れるなら尚更！」

「ごめんな、まさかこんな事になると思ってた……呪力を補う物とか、何も持っていないんだ」

「大丈夫！」とマサは頬を膨らませた。

「あ、でも……呪力を補う物とかよりも……お兄ちゃんが作ってくれるお菓子、お家に帰ったら食べたいな」

マコは一瞬だけ目を丸くさせ、紅桔梗色の瞳からポロポロと

涙を溢し始めた。

「そんなのっ……いくらでも作ってやるよ……」

「さて。お前……マミの式神だよな？ ご主人様が心配な所悪いが、ちと護衛を手伝ってもらってもいいかね」

「構いません。その為に私は居るようなものですから。……星宮様、本当に……ありがとうございます。貴方様と、天峰様が来てくれなければマミ様は——」

ヒュツと空を切る音と共に木槌が向けられた。

「そういうこと言われんのは好きじゃねえんだ。それに、まだアイツは頑張ってる。俺らはそれに応えてやんねえと……いけねえだろ？」

ガタガタと荷馬車が揺れる。それでもお姉ちゃんは目を開けることはなく、穏やかな呼吸を繰り返していた。

（まずは……さつき針が刺さった手を——）

一際大きく荷馬車が揺れ、カランと乾いた音がした。

「ああいけない！ お二人とも、それに触れないでください」

「……もしかして、これが毒針？」

マサとマコは眠るマミへともう一度顔をやった。

「あの、これ……一本にどのくらいの毒が盛られてるんですか？」

「申し訳ありません……こればかりは私達にも……」

「——急がなきゃ」

マサは自分の身体より一回り大きい服の袖を捲り、マミの患部に手を当てた。

◇
◇
◇

「……」ふと目を覚ますと、目の前には暗闇だけが広がっていた。

(……またか)

眠りの世界に入ると、いつも此所にいる。自分以外誰もいない、静かで暗い空間。ただ、今回ばかりは少しだけ違っていた。

目の前に誰かがいる。霧がかかったかのようにボヤけてよく見えないが、私と背丈が同じ誰かが此方をずっと見据えている。

「……誰？」

返事はない。人なのか判断もつけられない何かは姿をゆらませながら此方へと向かってきている。

(——そうか) マミは何かを悟ったようだった。

「お迎えだか何だかわからないけど……あの子達を守れた。それだけであたしの人生、十分。悔いなんて……」

「悔いなんて無い」そう言いたかったが、本当は少しだけある。

(マコと……マサの成長、見たかったなあ……)

「大丈夫」

自分が出した声ではないはずなのに、同じ声音で優しく囁く声をした。

……見慣れた天井がボヤけた視界の中に入り、何度か瞬きをして視界を整える。身体が酷く重たくて動けない。

「……姉さん？」

「お姉ちゃん……？」

声のした方へと首だけを動かせば、目元を腫らしたマコとマ

サがいた。

「姉さん……姉さん!! ここどこか分かる!？」

一度マコから視線を外し、目だけで周囲を見渡す。「……あたしの部屋……」と少し掠れた声で答えれば、ポロポロと二人は泣き出した。

「あたし……どのくらい、寝てた……?」

「三日間……お母さんが、解毒、してくれたけど……全然、目を……覚まさなくて……!」

「……そう、だったんだ……」

なら身体が怠いにも納得がいく。マミは動かせる左腕を支えにゆっくりと身体を起こした。

「マコ……マサ……おいで?」

「右側は無理だけど……」と言っている間に懐に鈍い衝撃が来た。

「良かったあ、良かったよお!!」

「もしかしたらっ、もう、姉さん……起きないんじゃないかって、思ってたから……本当に……ッ……!!」

本当は二人の頭を同時に撫でてやりたかったが、叶わないことだったので順番に優しく撫でれば更に二人の泣き声の音量が

増した。

「……マミの奴、起きたみたいだな。どうする? 俺らも顔見せるか?」

「……今は三人の時間にしてやろう。漸く目を覚ましたのだから」

「……そうだな。とりあえずサクラさん達呼んできてやろうぜ」
音なるべく立てないように二人は立ち上がり、マミの部屋の前から立ち去った。

お互い安心させるように肩を叩いた音が廊下に響いたが、それを聞いた者は誰もいなかった。



穏やかな風が頬を撫でた。

「よっ、もう起きてて大丈夫なのか?」

「まあ……少し陽に当たりたかったし。それにしても、毎日見舞いに来てくれるのは有り難いんだけど……飽きない?」

そう訊ねると、シンとグラスは「全然」と答えた。

「というか、見舞いに来ねえとお前脱走しそうだもん」

「失礼すぎやしませんかね……動きたくてもまだ動けませんし、両手がこれじゃ何も出来ませんから大人しくするしかないだけです」

そう言っただけで、ママは視線を両手にやった。右腕は三角中で嚴重に固定され、左手は掌全体を包帯で包まれていた。

「感覚は戻ってきているのか？」

「お陰さまで。まだちょっと鈍いけど、大体の感覚は戻ってきましたよ。こればかりは『体質』に感謝ですかね」

その言葉にシンとグラスは顔を少しばかり曇らせた。

「……何よ、二人して黙りこんで」

「いや……その……お前が半分は妖怪で、半分は獣人ってのは理解してはいるんだけどよ……今回ばかりは肝が冷えたんだぜ、俺達」

「……顔に消えない傷をつけられ、毒に蝕まれて、挙げ句は腕を折られかけた。だというのに安定もしていない半妖の力を使った。俺達がいなかったら、共倒れ覚悟だっただろう？ お前はもう少し自分を大事にするべきだ」

黙りこんでいると頭にポンと手が置かれ、左手に手が添えられた。

「お前さ、六道家じゃ年上でいなきゃいけねえかもしれないけどよ、俺ら三人の中じゃ一番年下だぜ？ もーちよいお兄様を頼りな！」

「こんな奴が一番年上なのに納得がいかないかもしれないが……シンの言うとおりだ。ママが嫌じゃないなら、俺達を頼ってくれ」

「……」

クスツと小さな笑い声が漏れた。

「……ありがとう」

その様子に満足しているのか、シンはママの頭を撫で回した。「いつも素直なら可愛いのに——いつてえ！ おまつ……放電はダメだろ！」

「ごめんなさい、つい……」

「ついてなんだよ！？ おいグラス、笑ってんじゃねえ！！」
三人の笑い声が縁側に響いた。

◇◇◇

「あれさあ……マサちゃんの治癒術のおかげでもあったんだろ

うけどよ、お前何で致死量の毒喰らっても大丈夫だったんだ？
まだ毒に耐性は持つてなかったんだろ」

「ああ……」とマミは頬を掻きながら答えた。

「多分……エンラが焼き尽くしてくれてたんだと思います。半妖としてはまだ目覚めてなかったけど——」

「なーに話してるの??」と明るげな声に話し込んでいた三人は顔をあげ、それぞれの顔を見やった。

「ただの昔話よ。あんたが初めて屋敷から出たときのね」

「初めて屋敷から出たときの……?」

マサは暫く何の事なのかを思い出していたが、やがて思い出したのか「あっ」と小さく呟き、顔を赤くさせた。

「マサさん?」

「まさか……僕とクルフィさんが打ち込み試合してる間、ずっとあの時の話してたの!? しかもお兄ちゃんは止めてくれなかつたの!?!」

「むしろ沢山話してくれましたよ……」とソルベが答えるとマサはわあっと顔を覆った。

「やだ……恥ずかしい……」

「皆さん、何を話されていたんですか?」

「マサちゃんが強くなろうって思った昔の話さ。……せっかく本人がいるんだ、色々教えてもらおうじゃねえか」

けらけらとシンは楽しそうに笑った。それに対してマサは尚も声を震わせつつ叫んでいた。

「笑う要素一つありませんからね!? 大体っ、そんな昔の事なんか覚えて——」

「見舞いに来る度、マミにくつついて出迎えてくれたのも忘れたのか?」

「義兄さんもさりげなく人の昔をバラさないでくれませんか!?!」

「マサさん」とクルフィが横から声を掛けた。

「良かったら聞いてみたいんだけど……ダメかな……?」

「~~~~ツ……!!」

僅かに淑女の口元が動いた。

……これは、一人の少女が愛する家族の為に己の呪いと向き合い、一人前の被い屋に成るまでの物語である。

追憶

紫雲英

今日は祖父の葬式だった。

祖母や母たちが棺の横で泣いている中、私は一滴の涙も流すことが出来なかった。

ただ呆然と立っているだけだった。

――

それは大学一年の夏休み、友達との旅行から帰ってきた次の日のことだった。

朝八時

旅行で疲れて爆睡していた私を母が叩き起こした。

「麗華！！おじいちゃんの様子がおかしい！！！」

私は驚いて飛び起きたが何が起きたのか全く分からなかった。

とりあえず、階段を降りて一階に行った母を追いかける。

一階の廊下は、救急隊員の人たちで埋め尽くされていた。見慣れている家の廊下なのに、全く知らない家に来ているような錯覚に陥るほど、景色も空気も何もかもが異様だった。

「AED 準備できました！」「ショックします！」「離れてくださいー！」

……ピーー

「再開します！」「1、2、3、4、5、6……」

心肺蘇生をする救急隊員たちの声が遠くで聞こえる。

「病院の選定決まりました」「搬送の準備をしてください」

救急隊員が急がしく動き回る。

「病院が確保できたので、これから搬送に移ります。」「ご家族の方はどなたか一人ついてきてください。」「搬送します。いちっにつさんっ」

担架の外にだらりと垂れたおじいちゃんの腕が目に焼き付いて離れなかった。

――

同行者として母がついていった。祖母は突然の事態にパニックしていたからだ。

おじいちゃんが病院に運ばれてから、三時間が経った頃母から電話がかかってきておじいちゃんが亡くなったことを知った。

――

おじいちゃんは私が物心ついたころから無口で穏やかな人だ

った。そんなおじいちゃんの横にいるのが幼い頃の私は大好きだった。

私の家は共働きで、幼い頃は両親の仕事が軌道に乗らず忙しかったせいで母方の祖父母の家で過ごすことが多かった。両親は余裕がなく家では何かと喧嘩が絶えなかったし、父方の祖母は遠くに住んでいる上に『女の子』である私を可愛がろうとはしてくれなかった。だから、私は母方の祖父母にとっても懐いていた。

当時、祖父母も製麺屋の仕事をしていて忙しかったはずなのに目一杯可愛がってくれた。特に仕事が終わったあとの祖父と過ごす穏やかな時間が私は一等好きだった。

絵を描くのがとても上手かった祖父の元に動物図鑑を持って行って「これを描いてあれを描いて」とせがんでいたのを昨日の日のことのように覚えている。

早朝から仕事で疲れているはずなのに、文句も言わずにいつばい絵を描いてくれた。その絵を描く姿を横でじっと見るのがとても好きだった。

絵を描いて貰ったあとに、季節の果物を祖母も入れた三人で食べてからお昼寝するのがお決まりだった。

私の無類の果物好きと野菜嫌いは絶対に祖父の影響だろうと、昔を思い出しながらふと笑みがこぼれた。

小学校に入ってから年々祖父母の家に行く回数が減った。行っても祖母と話すことが多く、祖父と話すことが減っていった。祖父と話すことが減った原因は、もちろん学校が忙しかったり、小学校に通いだしてお喋りになり祖母と話す時間が増えたこともあるが、とある出来事がきっかけで私が一方的に祖父のことを避けるようになってしまったからだ。

私が産まれる前、私には叔父（正確には母の弟になる人）がいたそうだ。

『いたそうだ』というのも、私が産まれる数年前に病気で亡くなったのだと母から聞いた。

遺影でしか顔を知らない叔父は幼い私からしたら他人と変わらなかつたし、ずっと昔に亡くなった人のように思っていた。それでも、母や祖母たちの話しの中で出てくる叔父の存在が少し気になっていた。

だから、祖父に叔父のことを聞いたのだ。聞いてしまった……「おじいちゃん、アキ叔父ちゃんってどんな人だったの？」

「――」

あの時、おじいちゃんがどう答えたのかどうしても思い出せない。でも、あの時の悲しさや怒りややるせ無さがぐちゃぐちゃになった顔をしたおじいちゃんが私は今でも忘れられない。

当時の私は、いつも穏やかなおじいちゃんを怒らせてしまつたと思い、怖くて逃げてしまつた。

それから何となく気まずくて、気軽におじいちゃんのところに行くことが次第に少なくなつていった。

――
葬儀まで怒涛のごとく時が過ぎて至つた。

検視にきた警察への対応、葬儀場の手配、親戚への連絡……

あつという間にお通夜が終わり、そして葬儀が終わつた。

火葬場で火葬が終わり、車に乗って家に帰る道中おじいちゃんとの思い出を思い出しながら、『もつと喋っておけば良かった』『もつと一緒に果物を食べればよかった』と今となっては無意味でしかないことばかり考えてしまつた。人はよく失つてから大切なことに気づくというけれど、本当にその通りだ。人はいつ居なくなるかわからない。次に居なくなるのは親かもしれないし友かもしれないし、私自身かもしれない。それは十年後か

もしれないし明日かもしれない。毎日の人と人との関わりはとも尊くて貴重なものなのだ。と、道路脇に咲き誇る彼岸花を眺めながら考えた。膝の上に乗せた手の甲に、ポタリと水滴が落ちていた。

『BANANA FISH』

著：吉田秋生



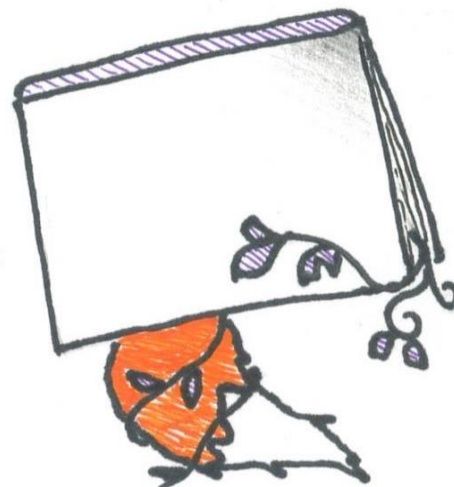
アニメ化・舞台化した 不朽の名作

舞台は1980年代のアメリカ・ニューヨーク、ストリートギャングを束ねる17歳のアッシュ・リンクスと日本人の青年・興村英二が仲間たちと共に「BANANA FISH」という謎の言葉を巡ってマフィアとの激しい抗争が繰り広げられます。予想のつかない、手に汗を握る怒涛の展開に、目が離せないこと間違いなしです。

「BANANA FISH」とは何か、抗争の中で築かれた友情と人間関係にも注目して、是非ご覧ください。

この本を盗む者

深緑野分



本嫌いの主人公が、
自分の町を救うため、

本の呪いに立ち向かいます。
-ラブリアカース-

medium 霊媒探偵城塚翡翠

相沢紗呼

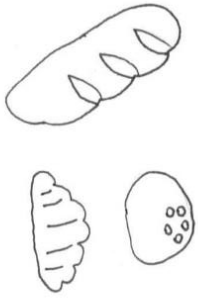
推理作家の香月史郎は、大学の写真サークルで出会った後輩の倉持結花から奇妙な相談を受ける。

「女の人があたしを見て泣いているって言うんです」
なぞを解決するため霊媒を訪ねるが、

死者が視えるという霊媒・城塚翡翠と推理作家・香月史郎
心霊と論理を組み合わせ、様々な事件に立ち向かう

二人の関係と衝撃のラストには目が離せない

現在ドラマで放送中のこの作品、ぜひ小説の方も読んでみてください！



今話題の絵本シリーズ「パンとどろぼう」
見た目は食パンみたいなパンとどろぼう。
おいしいパンを求めて
パン屋に忍びこみます。
はたしてその正体は...？

『線は僕を描く』

著：砥上 裕將

あらすじ

墨と水。そして筆だけで森羅万象を描き出そう
という試み、水墨画。

深い喪失の中にあった大学生の青山霜介は、
巨匠・篠田湖山と出会い、水墨画の道歩み始める。
湖山の孫娘・千瑛ら同門の先輩をはじめ、素晴らしい絵師との
触れ合いを通し、やがて霜介は命の本質へと迫っていく。

作者の砥上さんは水墨画家であり、小説家。
リアルで美しい水墨画の世界に引き込まれます！！
現在、映画化もされているので、
興味を持った方は是非読んでみてください！



○あとがき

ここまで文芸部部誌『花錦』第五号を読んで頂き、ありがとうございます。

昨年は、尚綱祭が中止になったことで、皆さんに部誌を手にとって頂く機会がありませんでした。そのためもどかしい思いがありました。今年も、皆さんのお手元に届けることができ、とてもうれしいです。さまざまなジャンルで、異なる雰囲気の小説や詩が詰まった面白い部誌になったと思っております。

そして、今回の部誌では部員のおすすめの本を紹介したPOPを掲載しました。気になる作品を見つけてみてください。

最後に、この部誌をお読みくださった皆様に感謝を申し上げます。少しでも楽しんで頂けたら幸いです。

文芸部部长 坂本実菜

○奥付

『花錦』第五号

令和四年(二〇二二年) 十一月二六日発行

〈発行所〉 尚綱大学文芸部

〈顧問〉 武田昌憲・山本歩

〈部長〉 「二年」坂本実菜

〈部員〉 「四年」川口くるみ・魚住有里・甲斐愛美・田邊ゆうこ・

虎口彩音

「二年」池田麻衣・井口愛生・森元李香・藤本紗羽

「二年」市川あい・尾本樹香・宮崎正恵

〈表紙デザイン〉 藤本紗羽

〈部室〉 七号館一階クラブ室一

〈内容〉 創作・鑑賞

〈連絡先〉 〒八六二・八六七八

熊本県熊本市中央区九品寺二丁目六番七八号

尚綱大学学生会 気付 文芸部